

# 日本柔道整復専門学校同窓会

## 第 60 回研究会 Report

HANADA-Jusei Newsletter #2

今年も恒例である日本柔道整復専門学校同窓会第 60 回研究会が平成 27 年 7 月 26 日(日)、花田学園 3 階講堂にて開催されました。梅雨も明け、太陽の日差しが厳しく照り付ける季節となりましたが 144 名と非常に多くの同窓生が参加され、熱気に溢れる研究会となりました。

今年で 60 回目という節目を迎えた同窓会研究会では太田総合病院、手外科センター副部長の根本高幸先生をお招きして『手指と手関節の外傷』という演題でご講演いただきました。

手指および手関節の損傷は、頻度も高く我々の業務に重要な位置を占めていますが、難易度の高い部位ゆえ、治療に困窮することもしばしばあります。手指部治療の第一線でご活躍中の根本先生の講演は非常に分かりやすく、日々の治療に役立つ内容ばかりで、参加者が熱心にメモを取る光景がみられました。

研究会の後には懇親会が開かれました。研究会の演者である根本高幸先生にもご参加頂き、会食を交え、恩師への近況報告や同窓生同士の情報交換をして親睦を深め、楽しいひと時を過ごしました。

### 日本柔道整復専門学校同窓会

#### 第 60 回研究会

受付	12:30
総会	13:00~13:30
講演会	13:30~15:30
懇親会	15:30~17:30



花田学園櫻井康司理事長



同窓会会長根本恒夫先生



受付を手伝ってくださった皆さん

## 「手指と手関節の損傷」



根本 高幸先生 (ねもとたかゆき)

太田総合病院 手外科センター副部長

日本整形外科学会認定 整形外科専門医、手外科専門医、リウマチ専門医

運動器リハビリテーション専門医、脊髄脊椎病医

(所属学会) 日本手外科学会、日本手関節学会、国際手外科学会、日本マイクロサージャリー学会



ご講演中の根本高幸先生



熱心に聞き入る参加者

## 【講演概要】

近代手外科の歴史は第一次大戦後、手を負傷した米兵たちが手の機能障害に悩まされ、その治療に当たった Dr. Bunnell の貴重な臨床体験と後輩医師の熱心な教育に始まります。その門下生はアメリカの各地で手外科センターを設立し、海外から多くのフェローを受け入れ、日本の手外科の発展にも貢献しました。

手の外傷はその歴史的教訓によると、初期の診断・治療を誤ると大きな機能障害が発生し、社会生活に重大な支障を来すと考えられています。その例として、Dr. Bunnell は屈筋腱損傷の治療に関して“no man’s land（立ち入り禁止地域）”の概念を打ち立て、「指の PIP から MP の間で断裂した屈筋腱はすぐに腱縫合せず、傷だけ縫合して、二期的に腱移植術を行うべきである」ことを提唱しました。

さらに“no man’s land”の概念は近年、手外科医による一期的腱縫合術へと発展し、今では“no man’s”から“someone’s”に、そして将来は手外科医以外でも簡単に治療が可能な“everyone’s land”になるような革新的な技術の発展が期待されています。

柔道整復師の方々にはスポーツイベントの救護活動、災害地での活動など、開業先以外でも手の外傷の初期治療に当たる機会も多いと思われます。手の外傷を扱う者は、複雑な手の機能解剖を理解し、手の外傷の治療に対する基本的知識を身につける必要があると考えます。そして、本日の講演が先生方の診断・治療の一助になればと思っております。

1. 手指外傷の落とし穴 (pitfall)
2. 手指関節外傷 (TFCC 損傷など)

## 懇親会



田淵健一理事による乾杯で懇親会スタート



根本高幸先生も懇親会に参加



卒業生と桜井理事長



互いの交流を深め合う参加者

## 【編集後記】

手指外傷は柔道整復師が、日常の業務で多く遭遇する外傷の一つです。指や手関節の解剖から、外傷、障害についてからその治療法まで詳しく説明いただき、とても興味深い講演でした。

ご講演ありがとうございました。（広報部長 田中康文）

注：掲載の写真および文章の転載を禁じます。